様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　７ 月　７ 日現在

機関番号：３７１１３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｈ０２４９１

研究課題名（和文）東アジアにおける国境観光の比較研究：境域社会の変容過程と「隣国関係」への影響評価

研究課題名（英文）Comparative Study on Border Tourism in East Asia: Changing Society in Border Regions and its Impact on International Relations with Neighboring States

研究代表者
花松　泰倫（Hanamatsu, Yasunori）

九州国際大学・法学部・教授

研究者番号：５０５３３１９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,100,000円

研究成果の概要（和文）：国境観光は政府間関係に影響を受けつつも地理的近接性や親密性、政治的・経済的・文化的差異を利用する境界地域に駆動されること、国境地域では隣国との人的交流の深化によって脱境界化、再境界化、新境界化の同時進行を促すことが明らかとなった。また、国境観光が隣国関係に与える影響は、日韓関係悪化、コロナ、ウクライナ戦争によって国境観光の基盤が失われた今後に解明されるべき課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
国際関係論研究では見落とされがちな国境（境界）地域における隣国との作用動態とメカニズムおよびその影響を明らかにした点に学術的意義がある。また、国境観光のあり方、動機づけ、共通に生じる問題などについて、我が国の国境（境界）地域自治体が共有し、人的交流の促進と境界地域の発展に寄与する点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Border tourism is promoted by borderlands (border regions) that take advantage of geographical proximity, mutual intimacy, political, economic and cultural “unfamiliarity” while being influenced by intergovernmental relations. Human interaction with tourists from neighboring countries brought by border tourism usually promotes the simultaneous interaction of de-bounding, re-bounding, and neo-bordering processes. In addition, the impact of border tourism on neighboring countries’ relations is an issue that needs to be clarified in the future when the basic condition for border tourism has been lost due to the deterioration of Japan-South Korea relations, Covid-19, and the Ukrainian War.

研究分野：境界研究（ボーダースタディーズ）

キーワード：ボーダーツーリズム　国境観光　境界地域　境域　ボーダースタディーズ　境界研究　国境

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
グローバル化の中で人間の諸活動が国家の枠組みを超えて自由に展開されるようになった一方で、領域を海に囲まれる我が国では「国境を素通りする」抽象的なイメージとしてトランスナショナルな諸関係が認識される傾向が強い。それゆえ、国境や境界に接する地域（境域）において隣国との間で具体的な形で生じている人、モノ、カネ、情報の接触によるトランスナショナルな現象は十分に注目されてこなかった。

２．研究の目的
境域独自の人、モノの動態変化の把握を目指す境界研究（ボーダースタディーズ）の知見を手掛かりに、我が国および東アジア境域で生じる国境観光（ボーダーツーリズム）の現状と機能について検討を行い、国境観光によって境域社会に生じるトランスナショナルな関係を理論的に整理することで、国際関係論研究の中に位置づけることを試みる。

３．研究の方法
我が国および東アジア境域において、越境する国境観光の取り組みが既に始まっている地域（対馬-釜山、稚内-サハリン、八重山-台湾、中露国境）、始まりつつある地域（五島-済州、小笠原-南洋群島）、かつて存在したが現在では行われていない地域（新潟-ウラジオストク）、主として越境しない国境観光が行われる地域（根室-北方四島、韓国-北朝鮮 DMZ）の 4 つのカテゴリー、9 つの境域を対象に、現地での聞き取りや資料収集によって以下の三点について現地調査を行い、比較検討を行う。
（１）国境観光の成立条件や地理的・地域的基盤、隣国関係からの影響
（２）国境観光の展開による境域社会の人々の認識とその変化
（３）国境観光の発展と境域社会の変容が「隣国関係」に及ぼす影響

４．研究成果
（１）国境観光の成立基盤
国家領域の縁辺部に位置することの多い国境地域は地理的近接性と歴史的、文化的交流の密度によって隣国の国境（境界）地域との国境観光を成立させる動機を持つこと、境界を挟んだ政治的・経済的・文化的差異（unfamiliarity）の戦略的利用がインセンティブとなることは、少なくとも日本の境界地域や極東、東南アジア地域には共通する。しかし、物流や情報と異なり平和産業である観光は人の物理的移動を伴うため隣国同士の国家間関係に一定程度左右される。2019 年の日韓関係悪化や 2022 年のウクライナ戦争によって日韓、日露の国境観光が凍結されたように、政府間関係の悪化によって国境観光が阻害される面は避けられない。他方で、そのような状況であっても国境地域の人々は上記インセンティブや動機を政府間関係とは無関係に持ち続け、国境観光の維持、再開を強く望むことも明らかになった。
（２）境域社会の変容過程
国境観光が成立する境界地域では短期的時間軸においても動態的変容が見られる。人の移動と交流の増大によって境界地域の人々に隣国に対する心理的境界（メンタルボーダー）が融解する脱境界化 de-bordering が進むことは事実である。しかし、国境観光の深化によって触れ合う機会が増え、コミュニケーションが深化すると、互いの文化やマナーの差異に敏感になり、排他的な眼差しに伴う再境界化 re-bordering も同時に進行する。さらに、排他的、対立的な契機をむしろ避けるために新たな線引きによって共存を図ろうとする新境界化 neo-bordering の現象も見られる。このように、国境観光は人の交流に伴って互いの包摂と排除のダイナミクスを生み、様々な地域、スケールにおいて脱境界化、再境界化、新境界化の同時進行を促すことがすべての調査地において観察された。
（３）隣国関係への影響評価
2019 年の日韓関係悪化、2020 年から続く Covid-19、2022 年に生じたウクライナ戦争によって、国境観光が隣国関係に与える影響について十分な調査、実証的分析が行えないまま本研究期間が終了した。一方で、国境観光が隣国関係にいかなる与えるのかは、国家間、政府間関係の悪化、グローバルリスク等によって国境観光の成立基盤が失われようとしている今日においてより明らかになる可能性が高い。その意味で、本科研終了後のさらなる調査分析と解明、成果の公表が目指される。
（４）終わりに
本研究は、境域独自の人、モノの動態変化の把握を目指す境界研究の知見を手掛かりに、我が国および東アジア境域で生じる国境観光の現状と機能について(1)国境観光の成立基盤、(2)境域社会の変容過程、(3)隣国関係への影響評価の三点について比較検討を行い、国境観光によって境域社会に生じるトランスナショ ナルな関係を理論的に整理することで、国際関係論研究の中に位置づけることを試みるものであった。2017 年度から 2019 年度までに、対馬釜山境域のみならず、研究分担者とともに東南アジア、八重山台湾、五島済州、中露国境等での現地調査を行っ

た。またその成果は、Association for Borderlands Studies、日本国際文化学会、日本政治学会などで報告を行った。さらに、多数の学術誌へ掲載されたほか、『ボーダーツーリズム―観光で地域をつくる』(北海道大学出版会、2017 年)、『つながる政治学:12 の問いから考える【改訂版】』(法律文化社、2022 年)、『「政治」を地理学するー政治地理学の方法論』(ナカニシヤ出版、2022 年)等の書籍で成果を公表した。当初の研究目的を達成するために順調に調査を進めてきたが、2020 年度より新型コロナウィルス感染拡大および海外渡航禁止措置により、国境を跨ぐ境界地域での人の移動が不可能となり、国境観光の成立基盤が失われた。対馬釜山地域では、新型コロナウィルス拡大前から日韓関係悪化によって国境を跨ぐ観光客の減少が見られ始めた。さらには 2022 年 2 月 24 日に始まったロシアによるウクライナ侵攻により、日露間での人的交流がストップし稚内サハリン間の移動ができない事態となった。(1)「国境観光の成立基盤」が失われることによって、(2)「境域社会の変容過程」(3)「隣国関係への影響評価」の解明が求められるが、本科研終了後での分析、成果の公表が計画されている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 古川浩司	４．巻 2
２．論文標題 日本の国境離島自治体における国民保護行政	５．発行年 2018年
３．雑誌名 グローバルセキュリティ調査報告	６．最初と最後の頁 46-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古川浩司	４．巻 39
２．論文標題 日本の有人国境離島における安全保障態勢	５．発行年 2018年
３．雑誌名 社会科学研究	６．最初と最後の頁 45-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Furukawa Koji	４．巻 12
２．論文標題 A New Departure? Japan's Border Politics in the 21st Century?	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Border Bites	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岩下明裕	４．巻 9
２．論文標題 進化するボーダースタディーズ:私たちの現場とツーリズム	５．発行年 2019年
３．雑誌名 境界研究	６．最初と最後の頁 91-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 岩下明裕	4．巻 196
2．論文標題 北方領土問題への墓標 ： 2016年12月安倍・プーチン会談という歴史的転換	5．発行年 2017年
3．雑誌名 地理の研究	6．最初と最後の頁 10-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 花松泰倫	4．巻 103
2．論文標題 多層的ボーダーに生きる苦悩と光―中露アムール国境への旅を通して―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 地田徹朗・柳澤雅之（編）『ユーラシア国境域の自然環境と境域社会の生活戦略』京都大学東南アジア地域研究研究所 CIRAS Discussion Paper No.103	6．最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yasunori Hanamatsu, Tomomi Yamashita, Shota Tokunaga	4．巻 0
2．論文標題 Sustainable Community Co-development Through Collaboration of Science and Society: Comparison of Success and Failure Cases on Tsushima Island	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Tetsukazu Yahara ed., Decision Science for Future Earth, Springer	6．最初と最後の頁 133-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-981-15-8632-3_6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計23件（うち招待講演　7件／うち国際学会　17件）

1．発表者名 Yasunori Hanamatsu
2．発表標題 Co-producing sustainable local community in collaboration between science and society: the case of Tsushima island
3．学会等名 World Social Science Forum 2018（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 Furukawa Koji
２．発表標題 The New Departure of Japan's Border Politics in 21st Century?
３．学会等名 Association for Borderlands Studies（World Conference）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 古川浩司
２．発表標題 「有人国境離島法」制定に見る日本のボーダーランズ政策における新展開
３．学会等名 日本政治学会2018年度研究大会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Akihiro Iwashita
２．発表標題 Border Tourism in Japan Today: Development and Its Role in Remaking Borderlands
３．学会等名 Association for Borderlands Studies Annual Convention（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Akihiro Iwashita
２．発表標題 Border Tourism in Northeast Asia
３．学会等名 北東アジア経済フォーラム（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 岩下明裕
２．発表標題 ボーダーツーリズム：中露国境ツアー・トライアウト
３．学会等名 ツーリズムEXPOジャパン（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 岩下明裕
２．発表標題 ボーダースタディーズにおける中露国境地域の意味
３．学会等名 シンポジウム「北東アジアの鳴動」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keiko Tamura
２．発表標題 Nation-building in Singapore: The Authoritarian Structure of a “Vulnerable City-State"
３．学会等名 Harvard University Seminar "Origins of Prosperity and Stability: State Building in 20th Century Asia"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 田村慶子
２．発表標題 “不自由な”自由？：シンガポールの性的マイノリティ
３．学会等名 東南アジア学会2018年春季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yasunori Hanamatsu
２．発表標題 Border tourism and its impact on a changing borderland society: Cross-border tourism between Tsushima, Japan and Busan, Korea
３．学会等名 Association for Borderlands Studies, 59th Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 花松泰倫
２．発表標題 対馬・釜山ボーダーツーリズムの展開と境域社会の変容過程（パネルセッション「砦かゲートウェイか?―日本の島嶼から考える」
３．学会等名 日本国際文化学会第16回全国大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 花松泰倫
２．発表標題 持続可能な地域コミュニティ創出における「科学と社会との協働」：長崎県対馬市の事例を中心に
３．学会等名 科学技術社会論学会第16回年次研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Akihiro Iwashita
２．発表標題 A New Era of Geopolitics: Responding to the China-Russian Challenge
３．学会等名 Association for Borderlands Studies, 59th Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Akihiro Iwashita
２．発表標題 The Northern Territories and the Abe-Putin Meeting: Implications for the Asia-Pacific Region
３．学会等名 Korean Assoication for International Studies（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Akihiro Iwashita
２．発表標題 A Voice of the China-Russia Borders
３．学会等名 中国辺境研究所シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Akihiro Iwashita
２．発表標題 An Epitaph to the Northern Territories：A New Era of the Japan-Russia Relations?
３．学会等名 OSW （ポーランド東方研究所）特別セミナー（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Akihiro Iwashita
２．発表標題 The US-Russia-China-Japan Quadrangle: Multiple Perspectives on Northeast Asia
３．学会等名 英国キングス・カレッジセミナー（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Akihiro Iwashita
２．発表標題 Russian Realities in Northeast Asia China, Japan and North Korea
３．学会等名 日独センター　シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Akihiro Iwashita
２．発表標題 Japan Foreign Relations toward South/Central Asia Contextualize India, China, Russia and the US
３．学会等名 キューバ国際政治研究センターセミナー（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Akihiro Iwashita
２．発表標題 Russia in the US-Japan Alliance? Beyond Chinese and North Korean Challenges
３．学会等名 日米研究インスティチュート（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 花松泰倫
２．発表標題 ボーダースタディーズから見た対馬の韓国人観光
３．学会等名 経済地理学会西南支部・関西支部合同特別例会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 花松泰倫
２．発表標題 対馬・釜山ボーダーツーリズムと境界地域社会の変容
３．学会等名 第29回東アジア学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 花松泰倫
２．発表標題 対馬・釜山ボーダーツーリズムの展開と境域社会の変容過程
３．学会等名 人文地理学会政治地理研究部会第27回研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計14件

１．著者名 平井一臣、土肥勲嗣、宇野文重、池上大祐、渡邉智明、山田良介、花松泰倫、藤村一郎、篠原 新、原 清一、遠山 隆淑	４．発行年 2019年
２．出版社 法律文化社	５．総ページ数 250(135-155)
３．書名 つながる政治学：12の問いから考える	

１．著者名 佐道明広・古川浩司・小坂田裕子・小山佳枝	４．発行年 2019年
２．出版社 法律文化社	５．総ページ数 242
３．書名 資料で読み解く国際関係	

1．著者名 田村慶子	4．発行年 2018年
2．出版社 北海道大学出版会	5．総ページ数 68
3．書名 マラッカ海峡：シンガポール、マレーシア、インドネシアの国境を行く（ブックレット・ボーダーズ5）	

1．著者名 岩下 明裕、花松 泰倫、高田 喜博、島田 龍、古川 浩司、山上 博信、斉藤 マサヨシ	4．発行年 2017年
2．出版社 北海道大学出版会	5．総ページ数 270（1-28、35-60、133-158、161-177、185-241、247-250）
3．書名 ボーダーツーリズム―観光で地域をつくる	

1．著者名 環境経済・政策学会編、花松 泰倫 ほか	4．発行年 2018年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 814
3．書名 環境経済・政策学事典	

1．著者名 中嶋 毅、松井 康浩、宇山 智彦、池田 嘉郎、浅岡 善治、松戸 清裕、上垣 彰、日臺 健雄、ウェンディ・ゴールドマン、長尾 広視、石川 禎浩、麻田 雅文、井澗 裕、吉岡 潤	4．発行年 2017年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 316（261-286）
3．書名 スターリニズムという文明 ： ロシア革命とソ連の世紀 2	

１．著者名 今西 一、飯塚一幸、石川亮太、中村 平、天野尚樹、三木理史、水谷清佳、井潤 裕、広瀬玲子、玄 武岩	４．発行年 2018年
２．出版社 大阪大学出版会	５．総ページ数 346（240-274）
３．書名 帝国日本の移動と動員	

１．著者名 Akihiro Iwashita	４．発行年 2017年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 144
３．書名 Japan's Border Issues: Pitfalls and prospects	

１．著者名 屋良 朝博、野添 文彬、山本 章子、岩下 明裕	４．発行年 2017年
２．出版社 北海道大学出版会	５．総ページ数 64（はしがき、2-4）
３．書名 日常化された境界ー戦後の沖縄の記憶を旅する（ブックレット・ボーダーズ4）	

１．著者名 岩下 明裕	４．発行年 2019年
２．出版社 特定非営利活動法人国境地域研究センター	５．総ページ数 64
３．書名 世界はボーダーフル（ブックレット・ボーダーズ6）	

1．著者名 古川 浩司、ルルケド 薫	4．発行年 2020年
2．出版社 特定非営利活動法人国境地域研究センター	5．総ページ数 60
3．書名 知っておきたいパラオ（ブックレット・ボーダーズ7）	

1．著者名 『現代地政学事典』編集委員会	4．発行年 2020年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 888（558-559）
3．書名 現代地政学事典	

1．著者名 平井 一臣、土肥 勲嗣、宇野 文重、池上 大祐、渡邉 智明、山田 良介、花松 泰倫、藤村 一郎、篠原 新、原 清一、遠山 隆淑、小幡 あゆみ、石川 捷治、尾内 隆之、いのうえ しんぢ、前田 隆夫	4．発行年 2022年
2．出版社 法律文化社	5．総ページ数 256（139-159）
3．書名 つながる政治学〔改訂版〕	

1．著者名 山﨑　孝史	4．発行年 2022年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 242（205-216）
3．書名 「政治」を地理学する	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「ボーダーツーリズム　対馬（３）　適度な『違い』楽しむ韓国人」毎日新聞平成30年4月22日夕刊寄稿
https://mainichi.jp/articles/20180422/ddv/010/070/010000c
「ボーダーツーリズム　釜山（下）　異国の近さ実感する船旅」毎日新聞平成30年5月13日夕刊寄稿
https://mainichi.jp/articles/20180513/ddv/010/070/005000c
「ボーダーツーリズム　板門店（上）　間近に見る軍事境界線」毎日新聞平成30年5月20日夕刊寄稿
https://mainichi.jp/articles/20180520/ddv/010/070/024000c
JIBSNレポート16号（特集「JIBSN五島セミナー2018」）
http://borderlands.or.jp/jibsn/report/JIBSN16.pdf
岩下明裕「JR 九州高速船・対馬(比田勝)から博多への混乗便に乗る」NPO法人国境地域研究センター
http://borderlands.or.jp/essay/essay032.pdf
JIBSNレポート第15号 特集「JIBSN対馬セミナー2017：変貌するボーダー」
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jibsn/report/JIBSN15.pdf

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	古川　浩司 (Furukawa Koji) (00340183)	中京大学・法学部・教授 (33908)	
研究分担者	井澗　裕 (Itani Horoshi) (10419210)	北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・境界研究共同研究員 (10101)	
研究分担者	岩下　明裕 (Iwashita Akihiro) (20243876)	北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授 (10101)	
研究分担者	田村　慶子 (Tamura Keiko) (90197575)	北九州市立大学・法学部・教授 (27101)	
研究分担者	朴　鍾碩 (Park) (60615293)	九州大学・アジア太平洋未来研究センター・准教授 (17102)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計4件

国際研究集会 Northeast Asia's Faultline: One Hundred Years of Sino/Russian/Soviet Competitive Cooperation	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 Between Asias: Inter-regional Spaces	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 “All Hands on Deck?” Border Studies Seminar	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 Crisis in Northeast Asia	開催年 2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関